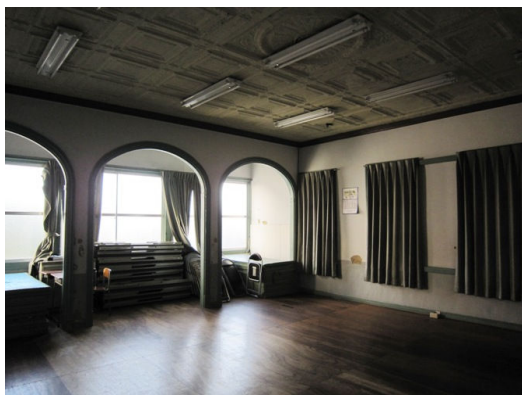


カフェの話（1）

「銀ブラ」という言葉がある。これは、東京の銀座をブラブラ歩くことを意味している。身近のことで言えば、関学の銀座通りをブラブラ歩くことであろう。しかし、この「銀ブラ」という言葉には、文化史的な香りが漂うもう一つの意味がある。1911（明治44）年12月に東京銀座に開店した「カフェ・パウリスタ」に1杯5銭という破格の値段で本格的なブラジル珈琲を出したそのカフェに、多くの人々が銀座にブラジル珈琲を飲みに出かけたことから「銀ブラ」と呼ばれたようである。因みに、その「カフェ・パウリスタ」のモデルはパリの著名なカフェと言われ、吉井勇、菊池寛、正宗白鳥、芥川龍之介、佐藤春夫などの文学者たちも常連客として足を運び、またジョン・レノンとオノ・ヨーコもお忍びで通ったと言われている。

ところで、銀座のカフェ・パウリスタが大きな話題を呼んだところから、全国にカフェ・パウリスタが次々に誕生し、関西では大阪の箕面に開店している。最近の調査では、箕面店は銀座店より半年ほど早い6月に開店したということで、箕面店が「カフェ・パウリスタ」第1号店という説もある。そのカフェ・パウリスタ箕面店の建物が、その後豊中に移築され、現存する日本最古のカフェの歴史的建造物として建築家などの話題となっている記事が、2年ほど前に、朝日新聞の夕刊一面に写真入りで大きく掲載されたことがある。その建造物は、現在、阪急豊中の駅前に地域の自治会館としてひっそり佇んでいる。写真は、その二階内部の歴史的な空間で、かつて関西の多くの人々、文化人を魅了してやまなかった栄華の跡である。近くまで出かけた折には、是非、立ち寄られたらいかがであろうか。



神田健次